
老人ボケボケと十二人のひ孫

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老人ボケボケと十二人のひ孫

【Nコード】

N89050

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

老人ボケボケと十二人のひ孫のひとり「リヨウタ」の話です。リヨウタは妹の親代わり。ボケボケが来るまでは…

「ボケボケ」「ボケジー」「ボケじーちゃん」

僕の曾おじいちゃんは皆からそう呼ばれている。

曾おじいちゃんは優しくて物知りだ。

僕は曾おじいちゃんが「ボケボケ」と呼ばれるなんて納得がいけない。

「ボケボケ！ショーギやろう！！」

僕の妹のミヨがリビングに座って新聞を読んでいた曾おじいちゃんに駆け寄る。

曾おじいちゃんは見ていた新聞を閉じて

「おお、お帰り」

と抱きつくミヨを受け止めた。

曾おじいちゃんが僕の家で暮らし始めてから三日経った。

ミヨは保育園から帰ってくると、曾おじいちゃんに教えてもらった将棋をやるのが日課になった。

「ミヨ、手え洗ったの？」

僕は曾おじいちゃんに抱きつくミヨに言った。

「今から洗うもーん」

ミヨは曾おじいちゃんにチュウして洗面台へ走る。

僕の両親は共働きで、僕が小学校に上がってからは僕がミヨの親代わりだ。

僕がミヨを送り迎えしているし、僕がいないとミヨは手も洗わない。曾おじいちゃんは言った。

「リヨウタ、これからはワシもミヨを迎えに行きたいなあ」

「うつん。学校の帰りだし、大丈夫だよ」

僕がミヨの親代わりなんだってば。

曾じいちゃんが家に住むようになったのは、曾おじいちゃんの家が古くなつたからだ。

曾おじいちゃんはずっと住んでいたその家が大好きだったけど、ボロボロになってある時天井が剥がれてしまった。

僕の両親が働いていて家を留守にすることが多く、ミヨがまだ小さいから、曾おじいちゃんが家にいたら安心だって。

だからお母さんは曾おじいちゃんと一緒に住むことにしたんだ。

今年も曾おじいちゃんの誕生日が来た。

毎年曾おじいちゃんの誕生日には親戚中が集まって、誕生日パーティを開く。

なんとたつて曾おじいちゃんには12人のひ孫がいるから大きなものになる。

毎年旅館を貸しきつて行われる。

ミヨは新幹線の中で

「ヨシくとケイタくとタツキくに早く会いたいな」と言つて曾おじいちゃんに

「男の子ばかりだなあ」

と笑われていた。

毎年のことだから僕はもうなんとも思わなかったけど

芳江おばあちゃんは僕とケイタを間違える。

ケイタは僕より一つ下の一年生だけど、僕と同じぐらいの身長になっていた。

ミヨはケイタを一目見て抱きつき、タツキはそれをひやかしていた。双子のモモちゃんとメメちゃんは二人でくつつきあって離れない。コウキくとユウキくんはひ孫たちの中で一番年上で5年生だ。二人で僕が欲しかったゲームで対戦してしる。僕は二人の真ん中でゲームを覗き込んでいる。カツちゃんは伯母ちゃんの側を離れない。サトミちゃんとメグミはお揃いのクマのぬいぐるみで遊んでいる。

毎年変わらない光景だ。

ご飯を食べるために皆が席に着いた。
ヨシくんが曾おじいちゃんに花束を贈った。
「ボケじーさん！お誕生日おめでとうー！」
曾おじいちゃんはヨシ君の頭を撫でた。

みんな曾おじいちゃんのことを「ボケボケ」と呼ぶ。
曾おじいちゃんはそのことに怒らない。
優しいから。

小さい頃、ミヨがお母さんに聞いていた。
「ボケボケはミヨのひいおじいさんなの？」
曾じいちゃんの誕生日会の帰りの電車の中だった。

「そうよ」
「ママのひいおじいさんもボケボケ？」
「違うよ」
お母さんはミヨが大きな声を出さないよう、ミヨを膝に抱っこして顔を近づけた。

「じゃあボケボケはひいおじいさんじゃないんだ」

「ミヨの曾おじいさんよ。ママの曾おじいさんはボケボケのお父さんよ」

「分かんない。」

「ママのおじいさんがボケボケ」

お母さんは諭すように言った。

「ボケボケはひいおじいさんでおじいさん。変なの」

ミヨは口を尖らせていた。

僕を除いた１１人のひ孫にとってはボケボケ。

「ボケボケ」

僕も小さい頃は曾おじいちゃんの事をそう呼んでいた。

ボケボケはやさしくて、僕のどんな疑問にも答えてくれる、物知りだ。

保育園でいつもボケボケの自慢をしていた。

僕はボケボケが僕の曾おじいちゃんだって気づいた。

保育園の先生に「ボケボケってだあれ？」

って聞かれてからだ。

あんなに凄い大好きだったボケボケが、僕の曾おじいちゃんだって気づくと、

一気に色あせたような気がした。

ボケボケってただの曾おじいちゃんだったんだ。って。

曾おじいちゃんの誕生日パーティも終わって、
またいつもの生活が始まる。

両親はやっぱ仕事忙しい。

曾おじいちゃんは朝と夕方、散歩をするようになった。

僕は散歩をする曾おじいちゃんと一緒に、ミヨの保育園の送り迎えをするようになった。

ミヨは「ボケボケと手をつなぐ!」と言って離さない。

僕は後ろから二人の背中を見つめて歩く。

学校から保育園に迎えに行くと、もう曾おじいちゃんが来ていて、二人で僕を待っている。

「おにーちゃんは来なくていいよ!」
とミヨに言われる。

僕がミヨの親代わりだったのに。

僕はミヨの送り迎えをやめた。

「リヨウタ、ちょっといいかい」

曾おじいちゃんが僕を呼んだ。

ミヨが「今日は一人でお風呂に入る!」と言って僕を追い返し、僕が裸のまま脱衣所でボーゼンとしていた時だ。
両親はまだ帰ってきてない。

僕はいそいそと脱いだばかりの服を着た。

ちょっと気持ち悪かった。

テーブルにお茶を二つ置き、曾おじいちゃんが言った。

「リヨウタはミヨのお父さんじゃないんだぞ」

僕と曾おじいちゃんは向かい合って座っていた。

「知っているよ。お兄ちゃんだよ」

僕は言い返した。怒られているのかなと思った。

「そうだ。リヨウタはお兄ちゃんだ。だからミヨの親代わりなんて

しなくていい」

曾おじいちゃんはズズっとお茶をすすった。

僕は「うん」と返事をした。

だけど、納得がいかなかった。

なんで曾おじいちゃんにそんなこと言われなきゃいけないの？

「だけど…」

「リヨウタはミヨのお兄ちゃんの前に『リヨウタ』だ。ワシもいる。一人でミヨのことまで抱え込もうとするな」

僕はミヨの親代わりのお兄ちゃんだった。

僕がしっかりしていないとミヨは帰った後手も洗わない。

僕はミヨのお兄ちゃんに「リヨウタ」。

ミヨの親代わりの前に、ミヨのお兄ちゃんの前に「リヨウタ」。

分かってるよ。

「じゃあ、曾おじちゃんもミヨの親代わりできないよ」

僕は負け惜しみのように言った。

「ワシはミヨの親の親だぞ」

「だって、曾おじいちゃんは『曾おじいちゃん』じゃなくって『ボケボケ』でしょ」

「ワシは吉岡善太郎だ。…好きでミヨの親代わりしてるんだよ」

曾おじいちゃんは笑った。僕も笑う。

「僕だって好きでミヨの親代わりやりたいんだ」

「そうか。それはいい！」

お茶を飲んだらそれはお茶じゃなくてウーロン茶だった。

脱衣所でミヨが「おにーちゃん！タオルー！」と僕を呼んでいた。

ボケボケのおかげで僕は学校帰りに友達と遊ぶようになった。
僕はミヨのために自分を犠牲にしているなんて思ったことはなかったけど、

友達には「付き合いがなくなった」と言われる。
僕は僕らしく生きてるよ。今も昔も。

ミヨは相変わらずボケボケが大好きだ。

ミヨだけじゃなく12にんのひ孫たちもボケボケが大好きだ。

ボケボケは僕の「曾おじいちゃん」じゃなくて「ボケボケ」だ。

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

私は、私と私の立ち位置について考えました。

私は私の弟にとっては「姉」で

親にとっては「子供」で

担任にとっては「生徒」で

友達にとっては「友達」です。

逆も然り。

これでいいのか。いいのだ！！

と思ってこのお話を書きました。

楽しんで読んでいただけたなら嬉しいです。

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905o/>

老人ボケボケと十二人のひ孫

2011年10月8日01時13分発行